

無題

友よ！沸騰の青春3年を共にした友垣よ！ お互いは喜寿に至ったか、あるいは至ろうとしている。戦中戦後の中を生き抜いたことを思うと、すごく祝うに値する。と同時に、この77歳は平均寿命でもある。後なり先なりの小さな差はあろうとも、人生の幕は降りようとしている。

お前の番だ、何でもよいから書け、という。この期に至れば書けなくなっていることに、自らも驚いている。私はどちらかというところを苦手とする方ではない。しかし、書くということは、対立する相手がなければ、書いて説得論破しなければという気にならねば書けない。わが友がどうして「相手」として考えられよう。3年の縁に連がるだけだが、利害一切なく決して相手とはなりえない。

近況でもよいからと言う。では、それを。ほんとうに由無しごとを。

「お元氣そうですね」とよく挨拶される。その度に、また来た、とあわてる。

「エエ、まあ、何とか」と意味のないことを返事する。不治の病ですよと言ったって、よくも悪くもなりはしない。自分から病気をひけらかすのは女々しい。

われ老いたりと自覚するのは、加齢だけではなく、病気に悩まされ、からだの故障に苦しむようになった時である。良寛の老いを詠んだ長歌の最後に、「かにかくに術なきものは老いにぞありける」とある。なす術が失われて途方に暮れるのが老いである。肝心の目と耳が、ぎりぎりまで機能低下してしまった。平衡感覚も狂った。庭池の縁石に頭と脇腹を強打した時にはおしまいかと思った。街を歩く時は神経が張り詰め放し。補聴器では方向が分からない。後方が聞こえない。だから車にやられかかったことが幾度も。生き延びるためには毎日が学習である。

もの忘れ、したがってもの失いもひどくなった。金で買えないものを無くした時の無念さ、だったのにすぐ同じことを繰り返している。

喜寿の祝いで嫁たちが呉れた腕時計を、一カ月もするともう無くしている。あれほど念をおされたのに。なぜ念を押されたか。

大事な時計を既に無くしていたからである。私にとつて唯一の宝物。孫が小学校終わろうとする頃、私の誕生祝いにくれたものである。小学生には大金だったろう。私は大事にもち続けて十数年の大記録。ついになくなつたかと諦めていても、何処からか出てくる不思議さがつ

いて回った。棺に入れるんだよ、と頼んでいた。それを無くした嘆きを知っての今度の嫁たちの時計だった。私事談はだらだらになる。だからひそかに抱き続けている孫との一事を記して終わろう。孫の名は大(だい)。小1の時だった。彼が突然たずねる。「じーちゃんは何時まで生きるの？」内心大いにあわてたが、やおら答えた。「そーだね、大ちゃんが大学生になるまでは生きていたいね」すると、大の顔が曇った。「それは困るよ、じーちゃん。大ちゃんが大きくなって、じーちゃんのような年になって、一緒に天国へ行こう！」

私はさもしくも欲深い。彼が高校生の時確かめた。「お前、天国へ一緒に行こうと言った子供の時のことを覚えているか？」「ああ、覚えてるよ」

墓場まで持っていける。もう時計のことは考えない。

(旧制姫路高等学校 14 回生黎明会報 (1996 年頃))